

# 大学生の「ふれ合い恐怖的心性」に影響を与える要因についての 研究

溝口 剛・相星 友紀子・河野 伸子

A study of “commu-phobic” tendency among Japanese university students  
—Focusing on parent-child relations and narcissistic personality traits—

MIZOGUCHI, T., AIBOSHI, Y. and KAWANO, N.

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第37巻第2号

2015年10月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 37, No. 2, October 2015

OITA, JAPAN

# 大学生の「ふれ合い恐怖的心性」に 影響を与える要因についての研究 —親の養育態度と自己愛に注目して—

溝口 剛\*1・相星 友紀子\*2・河野 伸子\*3

【要 旨】 本研究では、親の養育態度、自己愛が大学生のふれ合い恐怖的心性にどのような影響を与えているかを明らかにするために、大学生1～4年生350名を対象に、「ふれ合い恐怖的心性」、「養育態度」、「自己愛」について質問紙調査を実施した。その結果、親の養育態度、自己愛のいずれもがふれ合い恐怖的心性に影響を及ぼしていることが明らかとなった。特に、母親の養護が高いほど、ふれ合い恐怖的心性は低くなることがわかった。また、自己愛のうち誇大性自己愛と過敏性自己愛の両方とも、ふれ合い恐怖的心性と関連があることが示唆された。

【キーワード】 ふれ合い恐怖的心性 養育態度 自己愛

## I 問題・目的

近年、対人恐怖は変化しており、対人回避を身体的な理由なしに訴える対人恐怖と目される一群の人たちがいることが、青年期臨床の最前線にいるスクールカウンセラーや学生相談に携わっている人々によって気づかれるようになり、山田(1992)はこれらの人たちを「ふれ合い恐怖症」と呼んだ。山田(1992, 前出)によれば、ふれ合い恐怖症とは、赤面恐怖や視線恐怖などの対人恐怖症にみられる身体的主題を訴えず、会食・雑談場面などの人間関係が深まる場になると不安を生じる病態であり、“ふれ合い場面での対人恐怖”とされている。岡田(2002)は、ふれ合い恐怖症者について、形式的・機械的な関係や、情緒的な深まりのない場面は問題なくこなせるが、対人関係が深まる場面において困難を感じるものとして考えられていると述べている。

さらに、山田(1989)は従来型の対人恐怖が中学生から高校生にかけて多く発症するのに対し、この「ふれ合い恐怖」は大学生年代に多くみられることなどをあげおり、一般青年において、ふれ合い恐怖症状が比較的継続的に続いている傾向は“ふれ合い恐怖的心性”といわれる。

---

平成27年6月1日受理

\*1 みぞぐち・つよし 大分大学教育福祉科学部心理学教室

\*2 あいぼし・ゆきこ 大分大学大学院教育学研究科学校教育専攻臨床心理学コース

\*3 かわの・のぶこ 大分大学教育福祉科学部心理学教室

岡田(2012)は、ふれ合い恐怖の心性を抱える青年において、「他者との関係から退き相手との距離をとることで安定しようとする方向」と、「関係を維持することにより傷つけられる恐れが生じ、それを回避するために、傷つけることを回避する中で円滑な関係を維持しようとする方向」の二つの方向があると指摘した。このことから、ふれ合い恐怖の心性の青年は、傷つき合うことを恐れ、表面上の付き合いをしたり、対人退却に陥ったりしてしまうという問題を抱えていることが明らかとなった。

ふれ合い恐怖に影響を及ぼす要因の一つとして、親の養育態度は、ふれ合い恐怖症が提唱されはじめた当初から示唆されてきた。山田(1989, 前出)は臨床的知見から、ふれ合い恐怖について述べており、ふれ合い恐怖のケースは情緒的交流の薄い家族状態で、母性的な援助の欠如があることや親子間では学業に関するコミュニケーションのみが目立つこと等を挙げている。更に、人間関係について、拡がりや発達のステップごとに援助を受けていないということも示唆している。また、福井(2001)も山田(1989, 前出)が挙げている母性的援助の欠如をふれ合い恐怖の青年の事例の中で見出している。さらに、山崎ら(2012)は質問紙調査によって、親の養育が少なかったと感じている青年においてふれ合い恐怖的傾向が強いことを示唆している。このように、ふれ合い恐怖にとって親子関係の重要さが示唆されているにも関わらず、親の養育態度との関係を調査している研究はまだ少ない。

また、ふれ合い恐怖の心性と自己愛の関連についての先行研究は多くなされている。自己愛を理解する理論的枠組みとしては、近年、自己愛の特徴を誇大性や攻撃性、他者の反応への無関心さの特徴とする自己愛である誇大型と、他者への評価への敏感さや内気さの特徴とする過敏型の2種類の下位型に大別するという考え方が注目されており(中山・中谷, 2006)、また、日本では、過敏型に近い事例が多いといわれている(福井, 1998)。しかし、これまで自己愛尺度として多く用いられてきたNPI(自己愛人格目録)では、誇大的な側面が強調されてきた。そのため、誇大性自己愛・過敏性自己愛の両方と親の養育態度との関係を明らかにすることで、より明確な関連が見出されると考え、両方の自己愛を測定するための尺度を用いることが有効であると考えられる。

ふれ合い恐怖は自己愛のうちの高慢、他者無視、すなわち誇大性自己愛と関係しているという研究結果が示されていた(福井, 2003)。しかしながら、伊藤ら(2011)は、誇大性自己愛傾向との関係が指摘されていたふれ合い恐怖の心性について、自己への傷つきを恐れるという過敏性自己愛とも関係があるのではないかと仮説を立て、自己愛的脆弱性尺度(目的感の希薄さ、承認・賞賛への過敏さ、自己顕示抑制、自己緩和不全、潜在的特権意識の5つの下位側面からなるとされる)を用いて研究を行った。その結果、ふれ合い恐怖の心性にも目的感の希薄さおよび自己顕示抑制という過敏性自己愛の側面が潜んでいることが示された一方で、自己緩和不全の低さと潜在的特権意識の高さもふれ合い恐怖の心性を高めているということが見出された。また、岡田(2012, 前出)は、評価過敏性-誇大性自己愛尺度(評価過敏性、誇大性の下位尺度を持つ)を用いて調査を行い、過敏性自己愛が関係調整不全に、誇大性自己愛が対人退却にそれぞれ関わるということを見出した。このように、これまで自己愛との関連における先行研究では、過敏性自己愛・誇大性自己愛の両方がふれ合い恐怖の心性に関連しているということが明らかになっている。

宮下(1991)は、自己愛が生まれる要因として、青年の自己愛的傾向と母親や父親の養育態度との関係を検討している。この調査では、(1)母親の養育態度においては、女子では、母親の暖

かい受容的態度が自己愛的傾向を抑制し、母親の感情的・情緒不安定な態度がこれを増長させる、(2)父親の養育態度においては、男子では、父親の養育態度を支配・介入的であったと認知するほど、女子では、父親の養育態度を暖かく受容的であったと認知するほど、それぞれ自己愛が高いことなどの結果が示された。また、小西・橋本(2003)は、青年男子においては父親の統制的な態度が自己愛を促進し、女子においては父親の愛情的な態度、統制的な態度、甘やかな態度が自己愛を促進すると述べている。このように、自己愛については、先行研究において性差が見られるため、本研究でも男女に分けて考察していくべきだと考える。

これまで他者からの評価を気にせず、他者無視、高慢で、一見したら自己中心的であると考えられてきたふれ合い恐怖的心性について、傷つけ合うことを恐れ、表面上の付き合いをしたり、対人退却に陥ったりしてしまうという問題を抱えていることが明らかになった(岡田, 2012, 前述)。また、ふれ合い恐怖的心性の規定要因として自己愛や親の養育態度を挙げている研究はあるが、ふれ合い恐怖的心性・自己愛傾向・親の養育態度を相互に関連づけて調査した研究はこれまでに見あたらない。よって本研究では、ふれ合い恐怖的心性の明確な規定要因を探ることを目的とする。また、ふれ合い恐怖的心性において近年、対人退却と関係調整不全との2つの下位因子があることが明らかになっていることから(岡田, 2012, 前出)、これら2つの下位因子に親の養育態度と自己愛がどのように影響しているかについても注目したい。この研究により、従来の対人恐怖症とは異なる、一見周囲から理解されにくい、ふれ合い恐怖的心性の青年の理解につながり、支援を行うための一助となると考える。

## II 方法

### 1 調査協力者

調査協力者は、大分大学生1~4年生452名である。その内、記入漏れなどを除いたものは350名分(男性168名、女性182名)であり、それらを分析対象とした。

### 2 手続き

2013年10月上旬に、大学の講義時間内で一斉に配布、記入、回収を行った。

### 3 調査内容

#### 1)回答者の基本属性

学年、年齢、性別、学部

#### 2)PBI(Parental Bonding Instrument)日本版

Parkerら(1979)を小川(1991)が妥当性・信頼性を確認したもので、「養護」「過保護」の2つの下位尺度からなる。質問項目は父親母親それぞれ25項目で、回答形式は「まったく違う」から「非常にそうだ」の4件法とした。

#### 3)自己愛的人格目録

相澤(2002)が作成した自己愛的人格目録を使用。「対人過敏」「対人消極性」「自己誇大感」「自己萎縮感」「賞賛願望」「権威的操作」「自己愛的憤怒」の7つの下位尺度からなる。質問項目は48項目で、回答形式は「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」の5件法とした。

#### 4)ふれ合い恐怖的心性尺度

岡田(2002, 前出)により作成されたものを使用した。「対人退却」と「関係調整不全」の2つの下位尺度からなる。得点が高いほどふれ合い恐ろしい傾向が高いと仮定される。質問項目は26項目で回答形式は「全然あてはまらない」から「非常によくあてはまる」の4件法とした。

#### 4 分析方法

まず各尺度の下位構造を明らかにするために、因子分析を行った。その後、親の養育態度及び自己愛がふれ合い恐ろしい心性に与える影響を明らかにするために、重回帰分析を組み合わせたパス解析を行った。これら一連の分析には IBM SPSS Statistics を用いた。

### Ⅲ 結果・考察

#### 1 各尺度の下位構造

各尺度の下位構造を明らかにするために、それぞれに因子分析を行った。各因子の解釈にあたっては、因子負荷量の絶対値が 0.4 を超える項目を採用し、各因子に十分な負荷量を示さない項目や、複数の因子に対して負荷量を示しているものは除外した。

##### 1)PBI 日本版

小川(前出)の先行研究をもとに母親と父親に分け、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った(Table 1, 2)。解析の結果、母親については 22 項目から構成される 2 因子を抽出し、父親については 23 項目から構成される 2 因子を抽出した。母親について、第 1 因子は 12 項目からなり、「母は、よく私にほほえみかけてくれた」、「母は、私に対して優しくかった」などの項目がみられたため、小川(前出)を参考に『養護』因子と命名した。第 2 因子は 10 項目からなり、「母は、過保護だった」、「母は、私がしようとするすべてにわたって、コントロールしようとした」などの項目がみられたため、小川(前出)を参考に『過保護』因子と命名した。父親については、第 1 因子は 10 項目、第 2 因子は 13 項目からなり、それぞれ母親と同様の項目が多くみられたため、こちらも第 1 因子を『養護』因子、第 2 因子を『過保護』因子と命名した。

母親について、『養護』の尺度平均得点は 39.8(1 項目あたり平均 3.32, SD=0.46)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、母親の養護性について「非常にそうだ～どちらかといえばそうだ」の範囲に含まれることを示している。『過保護』の尺度平均得点は 18.4(1 項目あたり平均 1.84, SD=0.49)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、母親の過保護さについて「どちらかといえば違う～まったく違う」の範囲に含まれることを示している。父親について、『養護』の尺度平均得点は 30.8(1 項目あたり平均 3.08, SD=0.60)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、父親の養護性について「非常にそうだ～どちらかといえばそうだ」の範囲に含まれることを示している。『過保護』の尺度平均得点は 22.1(1 項目あたり平均 1.70, SD=0.46)である。このことは、今回の調査対象者の多くにおいて、父親の過保護さについて「どちらかといえば違う～まったく違う」の範囲に含まれることを示している。以上の結果を踏まえると、調査対象者となった大学生の親の養育態度の傾向として、母親・父親共に、情緒的な関わりである養護性は高く、子どもをコントロールしようとするなどの過保護さは低いということがうかがえる。

また、母親・父親の PBI 日本版の下位尺度間相関を Table 3, 4 に示す。母親・父親ともに 2 つの下位尺度は互いに有意な負の相関を示した。さらに、男女差の検定を行うために、PBI 日

本版の下位尺度得点について  $t$  検定を行った。その結果、母親の養護 ( $t = -4.74$ ,  $df = 348$ ,  $p < .001$ ) について、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。その他、母親の過保護 ( $t = 0.61$ ,  $df = 348$ ,  $n.s.$ ), 父親の養護 ( $t = -1.70$ ,  $df = 348$ ,  $n.s.$ ), 父親の過保護 ( $t = 1.09$ ,  $df = 348$ ,  $n.s.$ ) については男女の得点差は有意ではなかった。このことより、男性よりも女性の方が母親からあたたかい態度を受けていたと感じていることが示唆された。PBI 日本版における男女別の  $t$  検定の結果を Table 5, 6 に示す。

Table 1 PBI 日本版(母親)に対する因子分析結果  
(最尤法・プロマックス回転)

項目	F1	F2
F1: 養護(12項目 $\alpha = .88$ , 尺度得点平均39.8, SD=0.46)		
母は、あまり私としゃべらなかつた。*	.81	.15
母は、私といろいろなことを話すのを楽しんでいた。	.74	-.04
母は、よく私にほほえみかけてくれた。	.71	.10
母は、私に対して優しくかつた。	.70	-.01
母は、私に対して冷たかつた。*	.64	-.02
母は、温かく優しい声で話しかけてくれた。	.63	.00
母は、私をほめてくれなかつた。*	.63	-.05
母は、私が精神的に不安定なときは、なだめてくれた。	.59	.05
母は、私に、自分は望まれていない子だと思わせた。*	.57	.01
母は、私が抱えている問題や悩みに理解を示してくれた。	.54	-.09
母は、私が必要とする事や望んでいることに、理解を示さなかつた。*	.45	-.27
母は、私が必要なほどには手助けしてくれなかつた。*	.42	.05
F2: 過保護(10項目 $\alpha = .83$ , 尺度得点平均18.4, SD=0.49)		
母は、私をできる限り自由にさせてくれた。*	.00	.81
母は、私の好きな時に外出させてくれた。*	.16	.78
母は、過保護だつた。	.23	.62
母は、私がしようとする事すべてにわたって、コントロールしようとした。	-.09	.60
母は、私のことを子ども扱いすることが多かつた。	.08	.52
母は、私に物事の決定を任せてくれた。*	-.07	.50
母は、私の好きなことをさせてくれた。*	-.19	.46
母は、自分がそばにいないとだめな子だと、私のことを考えていた。	-.07	.46
母は、私に好きな服を着せてくれた。*	-.20	.42
母は、私のプライバシーを侵害した。	-.23	.40
固有値	7.713	2.508
因子相関行列	—	-.52
	-.52	—

\*は逆転項目

Table 2 PBI 日本版(父親)に対する因子分析結果  
(最尤法・プロマックス回転)

項目	F1	F2
F1: 養護(10項目 $\alpha = .90$ , 尺度得点平均30.8, SD=0.60)		
父は、よく私にほほえみかけてくれた。	.87	.15
父は、私といろいろなことを話すのを楽しんでいた。	.83	.06
父は、温かく優しい声で話しかけてくれた。	.78	.03
父は、私が精神的に不安定なときは、なだめてくれた。	.78	.18
父は、あまり私としゃべらなかつた。*	.78	.12
父は、私に対して優しくかつた。	.68	-.15
父は、私が抱えている問題や悩みに理解を示してくれた。	.67	-.03
父は、私をほめてくれなかつた。*	.58	-.11
父は、私が必要なほどには手助けしてくれなかつた。*	.52	.14
父は、私に対して冷たかつた。*	.48	-.32
F2: 過保護(13項目 $\alpha = .85$ , 尺度得点平均22.1, SD=0.46)		
父は、私に物事の決定を任せてくれた。*	-.10	.67
父は、私がしようとする事すべてにわたって、コントロールしようとした。	-.10	.66
父は、私の好きな時に外出させてくれた。*	.17	.62
父は、私の好きなことをさせてくれた。*	-.16	.62
父は、過保護だつた。	.36	.60
父は、私をできる限り自由にさせてくれた。*	-.05	.60
父は、自分がそばにいないとだめな子だと、私のことを考えていた。	.17	.56
父は、私のことを子ども扱いすることが多かつた。	.04	.55
父は、私が自分で意思決定するのを、好ましく思ってくれた。*	-.32	.48
父は、私のプライバシーを侵害した。	-.16	.47
父は、私が大人びてくることを喜ばなかつた。	-.15	.42
父は、私に好きな服を着せてくれた。*	-.02	.42
父は、私を自分に頼らせようとした。	.11	.40
固有値	8.771	2.706
因子相関行列	—	-.56
	-.56	—

\*は逆転項目

Table 3 PBI(母親)の下位尺度間相関

	養護	過保護
養護	—	-.486**
過保護	-.486**	—

\*\* $p < .01$ 

Table 4 PBI(父親)の下位尺度間相関

	養護	過保護
養護	—	-.487**
過保護	-.487**	—

\*\* $p < .01$

Table 5 PBI 日本版(母親)の t 検定結果

	女性		男性		t 値
	M	SD	M	SD	
養護(母親)	3.43	0.43	3.20	0.47	-4.74***
過保護(母親)	1.82	0.50	1.86	0.48	0.61

\*\*\* $p < .001$

Table 6 PBI 日本版(父親)の t 検定結果

	女性		男性		t 値
	M	SD	M	SD	
養護(父親)	3.14	0.60	3.03	0.60	-1.70
過保護(父親)	1.68	0.45	1.73	0.47	1.09

## 2) 自己愛的人格目録

相沢(前出)の先行研究や項目の内容から 2 因子を想定し、因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った(Table 7)。解析の結果, 41 項目から構成される 2 因子を抽出した。第 1 因子は 25 項目からなり, 「周りの人の視線が気になり落ち着かない」, 「引っ込み思案である」, 「自分が他人にどのような印象を与えているのかとても気になる」などといった過敏性項目がみられたため、『過敏性』因子と命名した。第 2 因子は 15 項目からなり, 「私にはもって生まれた素晴らしい才能がある」, 「自分の思想や感性にはかなり自信がある」, 「人の注目を浴びるのが好きだ」などといった誇大性項目がみられたため、『誇大性』因子と命名した。

『過敏性』の尺度平均得点は 73.8(1 項目あたり平均 2.95,  $SD=0.80$ )である。このことは, 今回の調査対象者の多くにおいて, 自己愛のうち過敏性が「どちらともいえない～どちらかといえばあてはまらない」の範囲に含まれることを示している。『誇大性』の尺度平均得点は 35.8(1 項目あたり平均 2.24,  $SD=0.64$ )である。このことは, 今回の調査対象者の多くにおいて, 自己愛のうち誇大性が「どちらともいえない～どちらかといえばあてはまらない」の範囲に含まれることを示している。以上の結果より, 調査対象者になった大学生の自己愛傾向として, 過敏性・誇大性な面は共に低いことがうかがえる。

また, 自己愛的人格目録の下位尺度間相関を Table 8 に示す。2 つの下位尺度は互いに有意な負の相関を示した。さらに, 男女差の検定を行うために, 自己愛的人格目録の下位尺度得点について t 検定を行った。その結果, 誇大性 ( $t=6.40$ ,  $df=348$ ,  $p<.001$ ) について, 女性よりも男性の方が有意に高い得点を示していた。過敏性については男女の得点差は有意ではなかった ( $t=-0.71$ ,  $df=348$ ,  $n.s.$ )。このことから女性よりも男性の方が, 誇大的な自己を抱きやすいことが示唆された。男女別の t 検定の結果を Table 9 に示す。

Table 7 自己愛的人格目録の因子分析結果  
(最尤法・プロマックス回転)

項目	F1	F2
F1:過敏性(25項目 $\alpha = .95$ , 尺度得点平均73.8, SD=0.80)		
周りの人の視線が気になり落ち着かない。	.78	.11
人に近づきたい気持ちがあるにもかかわらず人を避けてしまう。	.75	.07
周囲の視線が気になって、動作がぎこちなくなる。	.75	.10
失敗するのではないかといつも不安になる。	.74	.03
人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない。	.72	-.04
人と対面すると、相手を意識して緊張する。	.72	.00
人としても自分だけが取り残されたような気持ちになる。	.71	.11
人と自然に付き合えない。	.71	.04
人といると馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる。	.70	.18
自分が相手の人に嫌な感じを与えているのではないかと不安になる。	.70	.00
引っ込み思案である。	.70	-.07
自分に自信がない。	.69	-.19
大勢の人の前にいると、自分が圧倒されてしまう。	.69	-.04
内気な方である。	.69	-.09
気が弱い。	.68	-.07
周りの人に自分が変な人に思われているのではないかと不安になる。	.67	.09
自分が他人にどのような印象を与えているのかとても気になる。	.64	.10
無理して人に合わせようとして、窮屈な思いをする。	.63	.04
少しでも批判されたり非難されたりするとひどく動揺する。	.62	.02
何かに付け、他人の方が上手くやっているように感じる。	.61	-.08
自分の意見が正しいと思っても強く主張できない。	.59	-.05
決断力がない。	.57	-.13
先のことをくよくよ考えすぎる。	.53	.05
人と心から打ち解けて付き合うことができない。	.51	.03
知っている人を見かけても顔を合わさないように道を避ける。	.45	-.08
F2:誇大性(16項目 $\alpha = .88$ , 尺度得点平均35.8, SD=0.64)		
私にはもって生まれたすばらしい才能がある。	-.01	.75
他の人とは違って、自分はたぐいまれな存在である。	.03	.72
自分はきっと将来成功するのではないかと思う。	-.01	.69
自分にはどこか人を魅了するところがあるようだ。	-.12	.69
自分の思想や感性にはかなり自信がある。	-.09	.65
自分が偉大な人間になっているような空想をする。	.12	.61
人の注目を浴びるのが好きだ。	-.12	.60
ここぞという時には大胆に自己アピールをしたい。	-.03	.58
人々を従わせられるような権威をもちたい。	.07	.57
私の意見や考えに周りの人を従わせることができれば、もっと物事がうまく進むのに	.04	.56
自分の体を人に自慢したい。	.08	.54
人から賞賛されたいという気持ちが強い。	.18	.47
自分自身では、要領もいし賢明さも備えていると思う。	-.20	.44
人前で発表したり演技をしたりするのが得意だ。	-.29	.43
人に侮辱されたり蔑まれたりすると、怒りを抑えられなくなる。	.22	.42
自分の役に立つかどうかで友達を選ぶことは、正当なことである。	.10	.41
固有値	12.435	6.739
因子相関行列	—	-.18
	-.18	—

Table 8 自己愛的人格目録の下位尺度間相関

	過敏性	誇大性
過敏性	—	-.156**
誇大性	-.156**	—

\*\* $p < .01$ Table 9 自己愛的人格目録の  $t$  検定結果

	女性		男性		$t$ 値
	$M$	$SD$	$M$	$SD$	
過敏性	2.98	0.77	2.92	0.83	-0.71
誇大性	2.05	0.58	2.46	0.63	6.40***

\*\*\* $p < .001$ 

## 3) ふれ合い恐怖的心性尺度

岡田(2002, 前出)の先行研究より 2 因子を想定し, 因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った(Table 10)。解析の結果, 18 項目から構成される 2 因子を抽出した。第 1 因子は 11 項目からなり, 「できることなら人とあまり関わりたいくない」, 「友達と一緒にいるよりも, 一人の方が気楽だ」, 「できれば食事は一人でとりたい」などといった, 人との関わりを避けようとする内容の項目が多くみられたため, 岡田(2002, 前出)を参考に『対人退却』因子と命名した。第 2 因子は 7 項目からなり, 「人という場面で, 言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる」, 「他人とちょうどよい距離をとるのが難しい」, 「他の人は自分を受け入れてくれない」などといった, 人と親しくする場面において困難を感じるという内容の項目が多くみられたため, 岡田(2002, 前出)を参考に『関係調整不全』因子と命名した。

『対人退却』の尺度平均得点は 21.9(1 項目あたり平均 1.99,  $SD=0.55$ )である。このことは, 今回の調査対象者の多くにおいて, 対人退却について「あまりあてはまらない～全然あてはまらない」の範囲に含まれることを示している。『関係調整不全』の尺度平均得点は 14.6(1 項目あたり平均 2.08,  $SD=0.56$ )である。このことは, 今回の調査対象者の多くにおいて, 関係調整不全について「よくあてはまる～あまりあてはまらない」の範囲に含まれることを示している。以上の結果より, 調査対象者になった大学生のふれ合い恐怖的心性の傾向として, 他者との関係から退き相手との距離をとる傾向は低い, 表面上では円滑な関係を維持しようとしているが不安を抱えている傾向はややみられるとうかがえる。

また, ふれ合い恐怖的心性の下位尺度間相関を Table 11 に示す。2 つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。さらに, 男女差の検定を行うために, ふれ合い恐怖的心性の下位尺度得点について  $t$  検定を行った。その結果, 対人退却( $t=3.28$ ,  $df=348$ ,  $p<.001$ )について, 女性よりも男性の方が有意に高い得点を示していた。関係調整不全については男女の得点差は有意ではなかった( $t=1.27$ ,  $df=348$ ,  $n.s.$ )。ふれ合い恐怖的心性尺度について岡田(2002, 前出)・山崎ら(前出)が男女間の比較を行っており, 本研究の結果と同様に, 対人退却で男性の方が女性より高いという結果を得ている。このことから本研究結果では先行研究の結果と同様に対人関係における困難を抱えた時, 男性が対人関係からの退却へ向かう傾向が認められた。男女別の  $t$  検定の結果を Table 12 に示す。

Table 10 ふれ合い恐怖的心性尺度に対する因子分析結果  
(最尤法・プロマックス回転)

項目	F1	F2
F1: 対人退却(11項目 $\alpha = .88$ , 尺度得点平均21.9, SD=0.55)		
昼食は友だちと一緒に食べるのが好きである。*	.79	-.21
できれば食事は一人でとりたい。	.78	-.09
できることなら人とあまり関わりたくない。	.71	.06
友達と一緒にいるよりも、一人でいる方が気楽だ。	.67	.06
友だちと一緒に食事をするのは好きでない。	.66	.18
一人でいるのは苦手だ。*	.58	-.42
他人と親しくなるのはうっとおしい。	.56	.22
大勢の友だちとワイワイ騒ぐのが好きだ。*	.52	.06
人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ。	.50	.23
一人で趣味に没頭していたい。	.49	.13
友達数人でのいる場面は苦手だ。	.43	.31
F2: 関係調整不全(7項目 $\alpha = .82$ , 尺度得点平均14.6, SD=0.56)		
他人の本音で、自分が傷つけられそうな気がする。	-.13	.74
人という場面で、言葉がなくなってしーんとしてしまわないかと不安になる。	-.20	.70
他人とちょうどよい距離をとるのが難しい。	-.08	.67
人と関わると、相手に自分の弱みを握られそうな感じがする。	.09	.63
他の人は自分を受け入れてくれない。	.15	.58
人という、イヤなことを頼まれる。	.06	.53
人といっても話題がなくて困ることが多い。	.12	.52
固有値	7.231	2.045
因子相関行列	—	.59
	.59	—

\*は逆転項目

Table 11 ふれあい恐怖的心性の下位尺度間相関

	対人退却	関係調節不全
対人退却	—	.535**
関係調節不全	.535**	—

\*\* $p < .01$

Table 12 ふれ合い恐怖的心性の t 検定結果

	女性		男性		t 値
	M	SD	M	SD	
対人退却	1.90	0.52	2.09	0.56	3.28***
関係調節不全	2.04	0.56	2.12	0.56	1.27

\*\*\* $p < .001$

## 2 重回帰を組み合わせたパス解析

親の養育態度、自己愛傾向が、ふれあい恐怖的心性に与える影響を検討するために、パス解析を行った。想定した因果関係は、1)親の養育態度はいくつかのスタイルが存在する、2)親の養育態度によって自己愛の傾向が異なってくる、3)その自己愛傾向によって、ふれあい恐怖的心性の傾向が変化してくる、というものである。これらの変数の因果関係を、従属変数と独立変数のレベルから(1)親の養育態度(4変数)、(2)自己愛傾向(2変数)、(3)ふれ合い恐怖的心性(2変数)の3段階に設定した。

解析は変数減少法の重回帰分析によって行い、第3水準の変数を基準変数にして第1第2水準の変数を説明変数にする解析と、第2水準の変数を基準変数にして第1水準の変数を説明変数とする解析を行った。解析の結果を、男女それぞれ Figure 1, 2 のパス・ダイアグラムに示す。矢印は有意なパスを示し、数値は標準偏回帰係数を示す。

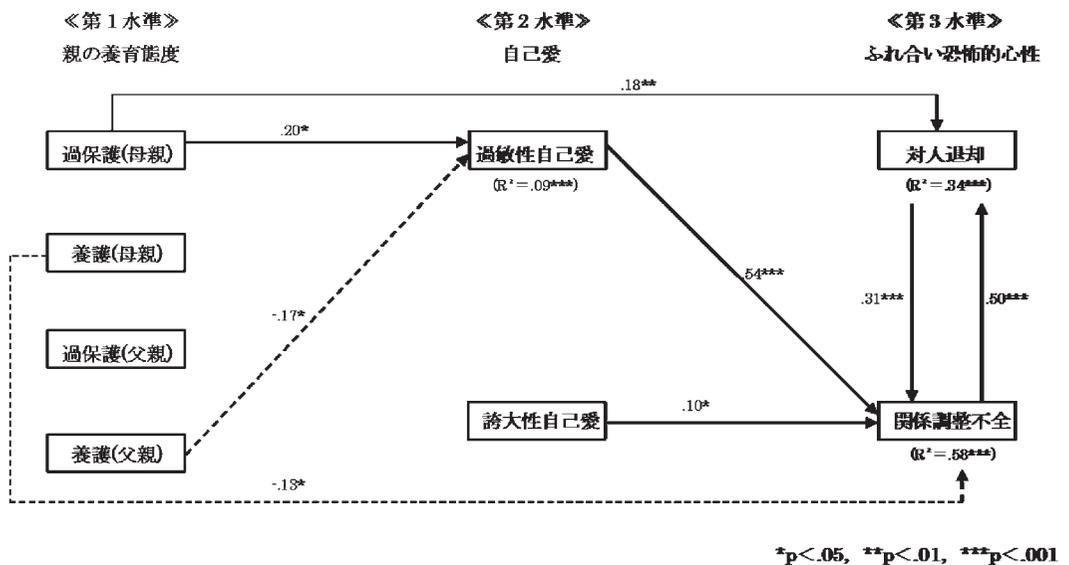


Figure 1 男性のふれ合い恐怖的心性に関わる変数間の関係(パス・ダイアグラム)

注1: 各変数の数値は自由調整済みの  $R^2$  の値で、各パスの数値は標準偏回帰係数の値である。

注2: 実線は正、点線は負のパスを示す。

分析の結果から、男性において、ふれ合い恐怖的心性の「関係調整不全」の生起に影響している要因は、自己愛の「過敏性自己愛」と「誇大性自己愛」、そして親の養育態度のうち「母親の養護」であることが示唆された。このうち「過敏性自己愛」の要因には、「母親の過保護」の高さと「父親の養護」の低さが影響を与えていることがわかった。一方、ふれ合い恐怖的心性の「対人退却」の生起に影響している要因は、親の養育態度のうち「母親の過保護」であることが示唆された。また、ふれ合い恐怖的心性の「関係調整不全」と「対人退却」はお互いに影響し合っているとの結果も得られた。

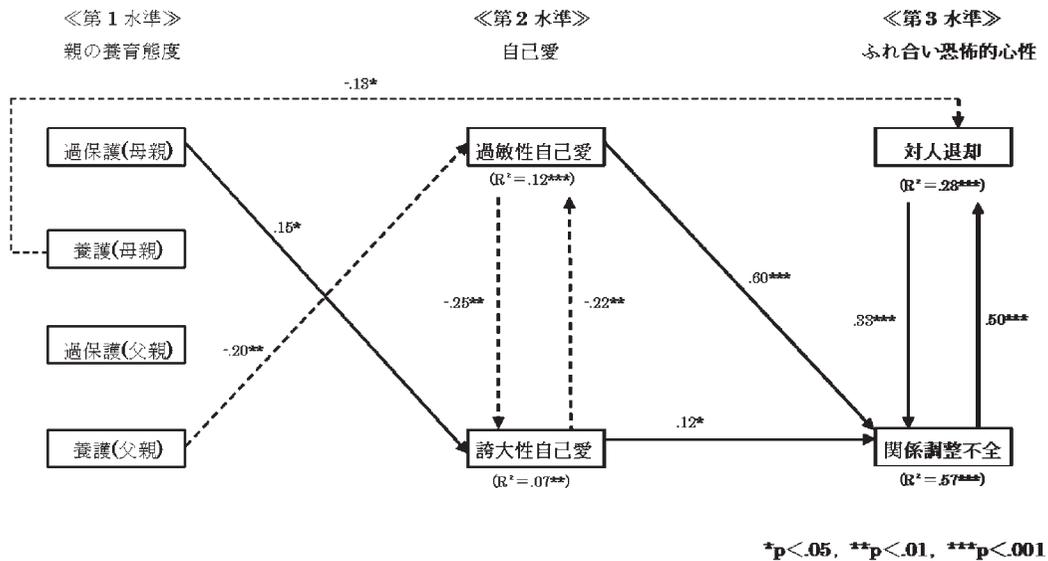


Figure 2 女性のふれ合い恐怖的心性に関わる変数間の関係(パス・ダイアグラム)

注1: 各変数の数値は自由調整済みの  $R^2$  の値で, 各パスの数値は標準偏回帰係数の値である。  
 注2: 実線は正, 点線は負のパスを示す。

また女性においては, ふれ合い恐怖的心性の「関係調整不全」の生起に影響している要因は, 自己愛の「過敏性自己愛」と「誇大性自己愛」であることが示唆された。このうち「過敏性自己愛」の要因には, 「父親の養護」の低さが影響を与えており, 「誇大性自己愛」の要因には「母親の過保護」の高さが影響を与えていることがわかった。一方, ふれ合い恐怖的心性の「対人退却」の生起に影響している要因は, 親の養育態度のうち「母親の養護」の低さであることが示唆された。また, ふれ合い恐怖的心性の「関係調整不全」と「対人退却」はお互いに影響し合っており, 自己愛の「過敏性自己愛」と「誇大性自己愛」も互いに影響を与え合っているとの結果も得られた。

男女それぞれの結果について, 親の養育態度に注目してみると, まず, 父親の養護が低かったと感じていると過敏性自己愛が高まるということは男女ともに共通していることが示された。莊厳(2003)は, 大学生に子ども期の親との関係についてきいており, その結果, 男子学生が父親との間に最もコミュニケーションがあったと回想したのは, 小学校入学以前であり, 女子学生は同じ時期, 普通以上に父親とコミュニケーションがあったと回想した。小学校低学年では 88.9%の男子学生と 88.8%の女子学生が, 普通以上のコミュニケーションがあったと答えている。それ以後, 父親とのコミュニケーションは順に減少して, 男子学生では高校時代に底を打つ。これに対して女子学生の底は中学時代にある。このように, 子どもと父親の関わりは, 一定時期から減少してしまうことが示唆されているため, 今後, 父親の養護性を高めることによって, 子どもの過敏性自己愛傾向やふれ合い恐怖的心性に陥ることを防ぐことができると考えられる。

一方, 母親の養育態度から受ける影響は性別により異なる結果となった。青年期はアイデン

ティティ確立の時期であり、親からの分離の時期である。そのため、母親が過保護であったと感じている青年男性においては、他人からの侵入を防ぐためか、人から距離をとって対人退却が高まる傾向がみられた。また、過保護な母親は子どもの自立を阻み、依存と承認を求める欲求を高めるがゆえに、過敏性自己愛を高めることが推測された。母親の養護が低かったと感じている青年男性は、関係調整不全を高め、対人場面で不全感を感じていることが示された。一方、母親が過保護であったと感じている青年女性においては、母親の注目を一身に受け、自身は特別な存在であると感じ誇大性自己愛が高まること、また、母親の養護が低かったと感じている青年女性は、人間関係から退く傾向が高まることが示唆された。これらのことから、男女ともに母親の養護の低さが対人関係においての不適応さに関連していることが示唆された。母親から情緒的なあたたかい対応を受けることで、人との関係の中で不全感を感じたり、人間関係から離れたりを防ぐことができるのではないだろうか。母親からのケアの重要性がうかがわれる。

また、自己愛に関してみていくと、男女に共通して、ふれ合い恐怖的心性のうち関係調整不全には過敏性自己愛と誇大性自己愛との両方が影響を及ぼしていることがわかった。これは、ふれ合い恐怖的心性は過敏性自己愛ならびに誇大性自己愛の両方から影響を受けているとする、伊藤ら(2011, 前出)や岡田(2012, 前出)の先行研究を一部支持するものとなった。伊藤ら(2011, 前出)については、使用したふれ合い恐怖を測る尺度が異なり、ふれ合い恐怖を「対人退却」と「関係調整不全」にわけてみていないため、本研究と結果が異なると考える。岡田(2012, 前出)の先行研究では、「過敏性」と「関係調整不全」には相関が見られ、「誇大性」と「対人退却」には弱い相関が見られたと考察している。また、岡田(2012, 前出)は、感情的側面である「関係調整不全」がもとになって、行動である「対人退却」を引き起こしていることを示唆している。本研究でも、自己愛からのパスはふれ合い恐怖的心性のうち「関係調整不全」に向かっているため、自己愛の影響はふれ合い恐怖的心性の中でも、まず、関係調整不全に影響を与えていることが示唆された。このことより、ふれあひ恐怖的心性を抱えている青年は、人と接する中で関係調整不全感や不安を感じ、人から離れようとしてしまい(対人退却)、人から離れ距離を置くがゆえに、対人場面でますます不全感を増大させてしまうという悪循環を生じさせる可能性があると考えられた。

以上のことから、親の養育態度・自己愛傾向・ふれ合い恐怖的心性を相互に関連づけてみていくと、男女ともに、母親の過保護な態度・父親の養護の低さが自己愛に影響を及ぼし、ふれ合い恐怖的心性を強めているということが示唆された。山崎ら(2012)は、親(特に父親)の養護が少なかったと感じている青年においてふれ合い恐怖的傾向が強いことを示唆しており、これは本研究の結果と一致していると考えられる。これらの結果から父親の養護が低い場合、父親から受け止めてもらった感覚が少なく、子どもは過敏性自己愛が高まり、周囲の他者からの評価を気にし、対人関係において深い繋がりを恐れ、ふれ合い恐怖的心性が高まることが示された。また、母親の過保護が自己愛に影響を及ぼし、ふれ合い恐怖的心性の要因になるということも示唆されたが、母親の過保護が影響を与える自己愛には上述のように男女で差が見られた。これは、青年期の心理的離乳プロセスにおいて見られる男女差に関係しているのではないだろうか。西平・久世(1988)のプロセスを元に、山本・岡本(2008)は、男性より女性の方が「親への甘え」が強く、女性よりも男性の方が「親から仲間への離脱」が強いという男女差について述べており、本研究でもこの男女の違いから、母親の過保護が自己愛に及ぼす影響において違

いが見られたのではないかと考える。女性は「親への甘え」が強いため、母親が過保護であった場合、自分は特別な存在であると感じ誇大性自己愛が高まる。これによって他者との関係の中でも自分は特別であると感じ、同年代の集団の中での活動がうまくいかずにふれ合い恐怖的心性が高まることが示された。一方、男性は「親から仲間への離脱」が強いため、母親が過保護であった場合、青年の自立を阻んでしまい母子密着の状態となり、母親の動向をうかがうようになってしまい、他者との関わりの中でも自信を持たずにふれ合い恐怖的心性が高まることを示唆された。

#### IV 今後の課題

本研究では、親の養育態度が自己愛・ふれ合い恐怖的心性に及ぼす影響については男女において異なる結果が示された。宮下(前出)は、母親の養育態度が青年の自己愛傾向に与える影響には性差があることを示唆しており、このような性差について、松元(1997)は、青年期は親からの第二の分離個体化の時期、つまり親から心理的に自立したい志向性が強まる時期であるため、パーソナリティへの影響は親以外の要因によるところが大きくなると指摘している。本研究においても自己愛の $R^2$ の値が低かったことから、自己愛の要因となる変数は、親の養育態度以外にもあると考えられる。小西(2009)も述べているように、今後は、青年期の自己愛傾向には親の養育態度だけでなく、友人関係など他の要因との関連を探っていく必要もあるかもしれない。

親の養育態度と自己愛の関連についてはこれまでも多くの研究がなされており、青年男性においては父親の統制的な態度が自己愛を促進し、女性においては父親の愛情的な態度、統制的な態度、甘やかしの態度が自己愛を促進する(小西・橋本、前出)などといった先行研究がみられるが、これまで見解の一致はみられていない。また、どの先行研究も自己愛のうち誇大性自己愛を測定する尺度を使用しており、自己愛を誇大的側面と過敏的側面の2つの側面からとらえ行われた研究はまだ少ない。しかし、日本においては、文化的背景から心理臨床の現場において過敏型自己愛傾向の事例が多いこと(福井、1998、前出)や、一般青年を対象とした非臨床群において過敏型自己愛傾向が不適応と関連していること(上地・宮下、2005)から過敏性自己愛傾向の側面を含んだ本研究の結果には意義があると考えられる。また、今後も誇大性・過敏性の両側面から自己愛を捉えていく必要があると考える。

さらに今回、ふれ合い恐怖的心性のうち関係調整不全と対人退却は互いに影響を及ぼし合っており、循環的な性質を持っていることが示唆された。しかし、ふれ合い恐怖的心性の下位因子である関係調整不全と対人退却に注目した研究はまだ少ないため、今後、関係調整不全と対人退却に対し、親の養育態度と自己愛以外の要因についても検討していく必要があると考える。

## 謝辞

本論文は、第二筆者が卒業論文研究として収集したデータをもとに作成いたしました。そこで、まずは調査実施のために貴重な授業時間を割いてくださった大分大学の先生方、質問紙調査に協力くださった大分大学生の皆様方に心より御礼申し上げます。そして、卒業論文研究を行うにあたって、多大なるご指導をくださった教育心理学選修・心理分野の諸先生方に御礼申し上げます。

## 引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大性と過敏性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- 福井敏 (1998). 誇大的な自己-自己愛障害 こころの科学, 82, 75-86.
- 福井康之 (2001). 対人恐怖の新しいタイプの出現について 神戸女子大学文学部紀要 34, 131-142.
- 福井康之 (2003). 女子青年のふれあい恐怖と外見恐怖 人間性心理学研究 第21巻第2号 187-197.
- 伊藤亮・村瀬聡美・金井篤子 (2011). 過敏性自己愛傾向が現代青年のふれ合い恐怖心性に及ぼす影響について-自己愛的脆弱性尺度を用いた検討 パーソナリティ研究, 第19巻第3号, 181-190.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフォートの自己心理学に基づく自己愛脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究第14巻, 第1号, 80-91.
- 小西瑞穂・橋本幸 (2003). 自己愛傾向と養育態度との関連からみた精神的健康について 日本性格心理学会第12回発表論文集, 122-123.
- 小西瑞穂 (2009). 自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連 東海学院大学紀要, 3, 125-127.
- 松元泰儀 (1997). 人間関係の変化 加藤隆勝・高木秀明(編) 青年心理学概論 誠信書房, 98-109.
- 宮下一博 (1991). 青年におけるナルシシズム(自己愛)的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, 39, 445-460.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達的变化の検討 教育心理学, 54, 188-198.
- 西平直喜 (1988). 青年心理ハンドブック 福村出版
- 小川雅美 (1991). PBI(Parental Bonding Instrument)日本版の信頼性, 妥当性に関する研究 精神科治療学, 6(10), 1193-1201.
- 岡田努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, 2002 第10巻第2号, 69-84.
- 岡田努 (2012). 青年期の「ふれ合い恐怖的心性」と「傷つけ合うことを回避する」傾向の関連について 日本教育心理学会第54回総会ポスター発表.
- 荘巖舜哉・荘巖依子 (2003). 子ども期の回想にみる現代青年の親子関係 発達研究, 17, 1-23.
- 山田和夫 (1989). 境界例の周辺 サブクリニカルな問題性格群 精神療法, 第15巻第4号, 350-360.
- 山田和夫 (1992). ふれ合い恐怖 子どもを“愛”せない母親たちと青少年の病理 芸文社.
- 山本彩留子・岡本祐子 (2008). 大学生の親に対する態度・行動とアイデンティティ, 対人態度の関連性 広島大学心理学研究, 第8号
- 山崎久美子 (2012). 大学生における対人恐怖的心性, ふれあい恐怖的心性と両親の養育態度について 心理臨床学研究, 29, 673-682.

## A study of “commu-phobic” tendency among Japanese university students

—Focusing on parent-child relations and narcissistic personality traits—

MIZOGUCHI, T., AIBOSHI, Y. and KAWANO, N.

### Abstract

This study was carried out on 350 university students to investigate the effects of parent-child relations and narcissistic personality traits on a “commu-phobic” tendency. They answered questions concerning “commu-phobic” tendency scale, a narcissistic personality traits scale and Parental Bonding Instrument. The result showed that both parent-child relations and narcissistic personality traits affect the “commu-phobic” tendency. High levels of care by the mother were negatively related to the “commu-phobic” tendency and narcissistic personality traits, while both grandiose traits and hypersensitive traits, were positively related to the “commu-phobic” tendency.

**【Key words】** “Commu-phobic” tendency,  
Parent-child relations, Narcissistic personality traits